

船井幸雄 発信

月刊 ザ・フナイ

本当の情報  
2009 12月号 Vol.27

特集

# 女性の力

新野房江・浅井弥生／佐藤比早子／高良喜美子／中村今代／新妻香織

TOP対談ゲスト

呉善花

特別掲載

カトレア・エレナ  
船井勝仁

連載

安保徹  
小山政彦  
koro先隆  
副島村矢伸  
中中フル フォー道  
古歩道  
ベンジャミン

株式会社 船井メディア

有限会社 ゆめの家 代表取締役  
高良喜美子



今こそ、

たましいの時代

沖縄における、たましいと肉体の法則

「魂に貯金し、魂を癒し、魂を喜ばせる」

沖縄県那覇市生まれ。県立那覇高校卒業。子どもの頃より、直観が強く神界霊界よりたびたびメッセージを受ける。卒業後、旅行社を経て、「礼法講師」「きものコンサルタント」の資格を生かし、呉服屋「ゆめの家」を開業。現在は呉服屋のおかみをはじめ、対面セッションやエキサイト電話占いによるカウンセリングや、スピリチュアルカウンセラー講座講師としても活躍。豊富な人生経験と直観力から生み出されるメッセージは、経営相談から子育ての悩みまで、訪れる人々の魂を癒し、相談者は年間500名を超えている。

【ゆめの家】  
〒901-0233  
沖縄県豊見城市字瀬長54番地  
TEL: 098-894-3814  
ゆめの家 <http://yumenoya.jp>  
スピリチュアル沖縄  
<http://www.spioki.com/>  
ブログ <http://yumenoya.ti-da.net>

私は子どもの頃から直観力が強く、花や動物と話をしていました。自分から話し掛けるというよりも、花や動物が話し掛けてくるのです。祖母が亡くなったときは、祖母の体から魂が抜けていくのが見えました。子ども心に不思議に思った私は、母に尋ねると、「皆も見えているから、喜美ちゃんはおかしくない」とのこと。母も、そして祖母も、その世界が見える人だったのです。

本人は気づいていませんでしたが、中学生の頃、

同級生からは「変わった子」と見られていたようです。しかも自分の発した言葉が現実のものになるという体験を何度もしていたことから、「プラスの言葉を発しないと怖い。やさしい気持ちにならないと大変なことになる」と思うようになり、「良かった探し」をするようになっていました。

私は不思議な世界と折り合いを付けながら成人しましたが、母親になったとき、その力が強くなり過ぎて日常生活に支障をきたすようになったため、封

印することにしたのです。その後、子育てと主婦をしながら、大手旅行代理店勤めを経て、着付け師範の資格を生かし会社を興しました。

そんなとき知人を通じて船井幸雄先生と出会いました。旅行代理店勤めの経験を生かし、沖繩を案内する役目を仰せつかったのです。沖繩を案内する道すがら、助手席に座る船井先生から、さまざま気づきをいただきました。中でも「霊は目ではなく脳で見ているのだから、チャンネルを変えなさい。霊が見える世界ではなく、神が見せてくれるこの三次元を見なさい。あなたの体は五次元の魂と三次元の肉体が一つにならないと生きにくいから、チャンネル操作を覚えなさい」という言葉に救われる思いがしました。

それまで船井先生のことを全く知らなかった私は、すぐに著書を読み、東京のセミナーにも参加するようになりました。母親業の傍らに仕事ができればいいという軽い気持ちで立ち上げた自営業でしたので、貸借対照表も読めない、代表者と代表取締役

の違いもわからない経営者でした。そんな「まちやぐわ（沖繩の方言で小さな商店という意味）経営」を「会社経営」に変えてくださったのも、船井先生のセミナーのおかげです。

何よりも私の心を捉えたのは、社長業は会社を経営するだけでなく、人間という器を大きくするための精神修行の場であるということでした。自ら学ぶことにより会社が活性化され、利益を生み、社員も育つ。資金繰りや社員のフォローなど苦しい面もありますが、それ以上に新しい感覚を与えられた喜びに満たされていました。

## 「命どう宝」カウンセラーの道へ

着付け教室で生徒さんを指導するなかで、さまざまな悩みなどを聞かされていた私は、船井先生の「直感力研究会」に参加する一方で、カウンセリングの勉強をはじめました。着付けを教えながら、ひたすら生徒さんの話に耳を傾ける。ただそれだけのこ

とでしたが、技術を習得されたあとでも、生徒さんには途切れることなく足を運んでいただき、口コミで生徒さんが生徒さんと呼んでくれるという理想の形ができあがっていました。

2年前、姑の介護のために自宅に事務所を移したことをきっかけに、本格的にカウンセリングをスタートさせました。母親として、経営者として、人間として、そしてスピリチュアルカウンセラーとして、学び、気づいたことを、皆に伝えるときがきたと思えました。

着付け教室で何気なく、生徒さんの話に耳を傾けていたことが、カウンセラーにもっとも大切な「傾聴」だということを改めて思い知らされているところでは、一人ひとりの命と真剣に向き合うことの大切さを実感しています。

沖繩には「命どう宝」という言葉があります。命こそ宝という尊い言葉です。カウンセリングを通して、命の大切さを伝えられればと思っています。いきいきと生き抜くことが一番。人は病気で死にま

せん、事故でも死にません。自殺でも死にません。これらはきっかけに過ぎません。人は寿命が来たらあの世に還るのです。だからこそこの世に思い残すことなく生き抜くことが大切です。それぞれの命を生き抜く、命が宝なのです。

命（魂）は与えられたもの。生きているのではなく、生かされていること。そして命を正しく使って上げることが大切です。自分の存在を喜べることは、とても大切であり、命を喜ばせることにもつながります。人は存在を認められることに喜びを感じるからこそ、お互いに認めて上げることが大切です。それはお互いの命を大切にすることに結びつきます。生きていることが大事で、存在していることが尊いということに気づいてほしいと思い、カウンセリングを行っています。

今、いろいろな悩みや問題を抱えた人がカウンセリングを受けに訪れますが、それらの問題は、私の問題でもあるのです。私を持っていた問題を、その人が見せてくれているのです。自分では解決した間

題だと思っただけでも、私はまだその問題の答えが見つけられていないことに気づかされるのです。その人に耳を傾け、「そうか、大変だったね」とうなずくことで問題を認めてあげ、カウンセリングしながら回答を導き出すと、私の答えも見つかるということに気づきました。

私のカウンセリングとは、その人の抱えている問題を、どうすれば気づくのか、痛みをスウィッチを押してあげることです。その痛みをもみほぐすのは本人です。ほぐすことで魂が喜ぶということをお伝えできればと思います。

私はこれまで好きなことをしたために、経営やカウンセリングのことなど、いろいろと学んできました。そして、周りのいろいろな人に支えられながら、たくさん好きなことをさせていたできてきました。そして今、学んできたことを伝える次のステージとして、スピリチュアルカウンセラーという仕事を与えられたのだと思います。

沖縄ではその時に、「まぶやーぐみ」という修法で魂を肉体に呼び戻します。沖縄が舞台の映画「ホテル・ハイビスカス」で主人公の女の子の魂を、おばあが肉体に戻す場面が出てきますが、あのようなことは日常茶飯事に行われているわけです。

私も、カウンセリングの際にクライアントが魂を落としている時には、このまぶやーぐみを行います。時間をもつたいたないので、なるべく儀式は簡略化して意識で行うのですが、本人の魂がきちんと肉体に戻ってくるのがわかります。魂が肉体に入ると目がパッチリして、意識がはつきりします。

沖縄には、私のように生まれつきそのようなことができる女性達がいるのです。肉体と魂の解明が進むことによって、このようなことがより解明されてきたと思います。

相談者への「まぶやーぐみ」を行っているとおわかりませんが、体から抜け出してしまう魂にはいくつもの数があります。沖縄の言い伝えでは7つという説もあります。また、魂は過去や未来、いろんな場所

## たましいの世界が解明されつつある

以前、船井先生の熱海事務所が開設された際のお祝いの会に、私も参加させていただきました。その場には、本田健さんや望月俊孝さんなど著名な方々がいらっしゃって、その時に先生が、あの世の次元に行くという話をしていたのを思い出します。

魂については、やはり沖縄という地は日本で一番「たましい」という言葉を日常で使っている場所だと思っています。沖縄では魂のことを「まぶや」または「まぶい」と言います。「まぶや」「まぶい」(魂)は私たちの体に宿っている生命力の源です。

ウチナーグチ(沖縄の方言)でイチマブイとは、「生きている魂」の事です。魂は不思議な習性をもっていて、驚いたりすると肉体から離れることがあります。離れるといっても死んでしまうわけではなく、なんとなくぼーっとしたり、心ここにあらずという感じになります。

へ自由に行ってしまうようです。

ある男性ですが、脳梗塞のうこうそくになつて体が半身不随になり、精神的にも追い詰められているということと相談にきました。話を聞いていても、原因と結果の因果関係に辻褄つじつまが合わないことがあったので、その方の意識に入り過去にさかのぼって見てみました。

するとこの男性は子どもの頃に、小学校でまぶやを落としていることがわかったのです。また大人になつてから、3年前に脳梗塞のうこうそくになつた場所にもまぶやを落としていることがわかりました。しかも小学生の時にまぶやを落とした際には、本人のものではないまぶやが入っていたこともわかりました。ただ、そのまぶやは勉強ができるまぶやだったので、男性はそのままにしたそうです。勉強ができるまぶやのおかげで男性の望みどおりに図書館司書の資格を得ることができました。しかしその後、勉強ができるまぶやが体から抜けていく感覚があり、全く勉強ができなくなったそうです。まぶやが抜けた状態というのは、心があるようでない、魂がまさに